



# ほうさ 第24号

1985年9月

名古屋市蓬左文庫  
Nagoyashi Hōsabunko

屢示風よ り

## 徳川義直の蔵書と著述

9.28(土)~12.1(日)

(10.30(水)・10.31(木) 展示替休室)

後に、尾張藩の初代藩主となる徳川義直は、慶長5年(1600)11月28日、石清水八幡宮の祠官志水宗清の娘お亀の方(相応院)を母に、家康の第9子として誕生した。その年の9月には、関ヶ原の戦いがあり、3年後の慶長8年には、家康の征夷大将軍任命、江戸幕府の創設と、新体制建設が着々と進められてゆく時代であった。家康は、慶長10年、秀忠に將軍職を譲り、後に御三家の祖となる義直、頼宣(紀州)、頼房(水戸)等三人の息子とともに駿府へ移った。義直は、元和2年(1616)家康の死去とともに、17才で尾張に入国するまで、幼年期、青年期の多感な時代を家康のもとで過ごすこととなる。駿府の家康のもとには、神、仏、儒にわたる当代有数の学者、僧侶が集められて講義、討論が行なわれ、義直等息子達も同席することが多かった。

学者の招聘をはじめ、金沢文庫本の探訪、駿河文庫の創設、伏見版、駿河版の出版と、家康は学術文化に対して深い関心を示し、学術文化の振興は彼の新体制構想の柱の一つでもあった。義直は、子供達の中でもっとも家康の学問好きな性格を受けついでといわれ、彼の学問および尾張藩の文教政策に与えた家康の影響を無視することはできない。

元和元年(1615)、16才の義直は、大阪夏の陣の帰途、京都で<sup>21</sup>19種<sup>140</sup>245冊の書籍を購入した。それは、「論語集解」「東鑑」など、中国の古典と日本の歴史書が中心であった。そして、元和3年、家康の死後尾張に入国した義直のもとに、家康の収集した駿河文庫の蔵書約3000冊が贈られたのである。駿河文庫は、家康が晩年駿府に創設した文庫で、その蔵書の収集にはあらゆる手段を費やしたと言われるほど、金沢文庫の旧蔵書をはじめ、朝鮮の役によって渡来した朝鮮本(15~16世紀の朝鮮の活字印刷の技術は世界的に優れていた。)など約1万冊におよぶ貴重本の宝庫であった。家康の死後、

江戸に送られた一部を除き遺言によって、尾張、紀州、水戸の御三家に5:5:3の割合で分配され、これが駿河御譲本と呼ばれた。家康の遺書によって義直の蔵書は一挙に質の高い充実したものとなり、現在の蓬左文庫の前身である尾張藩の御文庫の基礎が固められた。その後、元和8年頃までに購入や献上によって約2,000冊が蔵書に加えられるが、藩政の中枢を支える知識、情報の基盤である藩の御文庫としての蔵書の収集が本格的に始まるのは、寛永年間(1624~43)に入ってからである。収集活動は、寛永6年(1629)をピークに、寛永3~12、13年頃にもっとも活発に行なわれ、慶安4年(1651)、義直が死去した時の蔵書数<sup>調査点</sup>



「神祇宝典」

は約19,000冊と推定されている。この時期に収集された書籍には、特に中国で出版された新刊本を購入したものが多く、その内容は四書五経の類をはじめ、政治、経済、法律、歴史、地理、医学、天文学、芸術、文学に至るまで広く各分野に渡っており、御讀本と合せて義直の代には、すでに御文庫の骨組みがほぼ出来あがっていたとも言えよう。こうした広い範囲に及ぶ書物の収集を可能にしたのは義直の広い学識と同時に、彼に影響を与え、また側近として仕えた学者達の力によるものでもあった。

家康を別として、義直の学問に影響を与えた人物には、林羅山、角倉素庵(与一)、堀杏庵がいる。林羅山(1583~1657)は、義直の少年期からの学問の師であり、自らの著作をはじめ多くの書物の献上、義直の編纂書の序文の執筆など、終生義直の学問と治政に影響力を持っていた。一方、角倉素庵(1571~1632)は、海外貿易や河川開発等に携わった商人であると同時に、学者、蔵書家としても有名で、尾張入国後まもない義直に、中国や日本の歴史書を講じ日記の調査を行なうなど、その後の義直の学問に指針を与えた人物とも言える。また、堀杏庵(1585~1642)は元和8年に招聘され、晩年まで義直の施政を補佐した側近学者の第一号で、寛永年間を中心とした義直の取書、著作活動を実際に推進した中心人物である。この他、義直に仕えた学者には杏庵の一族・門弟に加え、中国直輸入の学問、技術を伝えた陳元賛、張振甫などの中国人学者もいた。

義直は収集した書物と側近の学者達の調査・研究によって、十数件の著作の編纂を行なっている。その内容は神道、儒学、歴史、兵学、家康の事跡などで、代表作として「神祇宝典」—全国の主要な神社を国郡別に分け、所在、祭神、由緒などを明らかにしたもの—「類聚日本紀」—神代より光孝天皇に至るまで歴代の事跡を六国史をもとに編纂したもの—「御年譜」—天文11年(1542)から慶長15年(1610)までの家康の事跡録—の三作品がある。これらは、三作品とも義直47才の正保3年(1646)に完成しているが、前の2作品については、調査の開始されたのが寛永初年前後といわれ20年にわたる資料の収集、調査の蓄積によるものであり、義直の学問、蔵書、文治政策の総決算であった。

「類聚日本紀」の義直の自撰とされる序文に書物について「秘惜を似て蔵と為ることを知て、伝布を以て稽と為ることを知らざれば、則ち箱篋・縹表の中、自ら不慮の秦劫有て、竟に一己の手に墜ち万衆の眼に上らず」とある。ここでいう「伝布」「万衆」が当然括弧つきのものだとしても、義直は書物が秘蔵されることなく広く活用されることをよしとしたことに違いはあるまい。義直の蔵書は、その約4割~5割が様々な理由で散逸したものの、残りは現在、蓬左文庫に所蔵され一般市民や研究者に広く活用されている。はるかに次元が異なるとはいえ、義直の理想は、現代の蓬左文庫において実現されていることは確かである。

〔参考文献〕

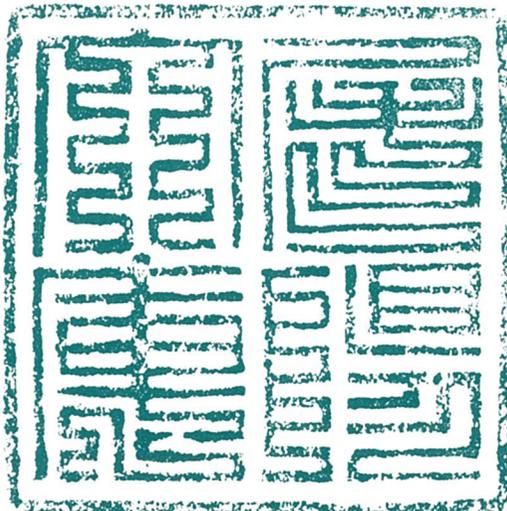
- 山本祐子「尾張藩『御文庫』について(1)—義直・光友の蔵書を中心に—」(『名古屋博物館研究紀要』8) 1985
- 跡部佳子「徳川義直家臣団形成についての考察(7)—義直の文治臣僚—」(『金鯉叢書』9)
- 田辺 裕「『類聚日本紀』の成立」(『神道史研究』18-4) 1970
- 田辺 裕「徳川義直の撰述書目(上・下)」(『芸林』18-1・2) 1967
- 川瀬一馬「駿河御讀本の研究」(『書誌学』通巻第16号) 1934

義直の蔵書に見られる印記



「御本」印(甲)

義直の蔵書印。大きさ、形のよく似た2種(甲、乙)と、ひとまわり小さく、用例が1件しかない1種(丙)の3種の印があった。駿河御讀本のほとんどと、元和年間までの蔵書の多くに「御本」印があるが、寛永年間以降の蔵書となると全体に対する捺された例の割合が極めて低くなる。甲(33×33mm)、乙(34×33mm)、丙(28×29mm)



「尾陽文庫」印(67mm方形印)

義直の時代に収集された書物にもっとも多く捺されている蔵書印。特に、寛永期以降の蔵書のほとんどにこの印記がある。ただし、これは義直の蔵書に限らず、2代光友以降にも使用例は多い。光友が義直の蔵書を受け継いだ後に、捺されたと言われる。しかし、時間的に「御本」印と併用された可能性もある。義直の時代の蔵書では、わずかな例外を除いて、第1冊目の巻頭のみ捺されている。因に光友の時代の蔵書では、全冊に捺されている例が多い。ほとんどは大きさ67mmの方形大型印だが、別に66mm方形の「尾陽文庫」印が捺されている例が義直の蔵書中にもわずかなだがある。この場合、どれも第1冊目巻頭に67mm方形印があり、2冊目以降の巻頭に66mm方形印がある。

# 「徳川義直の蔵書と著述」出品目録

○印「御本」印記  
△印「尾陽文庫」印記

## 著 述

- 1. 神祇宝典 正保3年写 9卷附図1卷10冊
- 2. 神祇宝典草稿 江戸初期写 7冊
- 3. 真清田社記 江戸初期写 1冊
- 4. 神道正宗〔中臣菟抄〕 江戸初期写 1冊
- 5. 類聚日本紀 寛政年間写(稲葉通邦校・筆)  
170卷系図4卷70冊
- 6. 同 昭和14年刊(複製)  
170卷系図4卷48冊解題1冊
- 7. 御年譜〔神君御年譜〕 江戸初期写 5卷5軸
- 8. 成功記 江戸初期写(堀杏庵筆) 18卷18冊
- 9. 初学文宗 江戸初期写 1冊
- 10. 證軍 同 3卷3冊
- 11. 軍證志 江戸中期写 3卷3冊
- 12. 軍書合鑑 同 1冊
- 13. 夢想之倭漢 同 1冊
- 14. 清須翁物語 同 1冊
- 15. 君戒〔御宝訓〕 同 1軸

## 蔵 書

〈駿河御讓本〉

- 16. 日本書紀神代卷 慶長14年写(卜部兼見筆) 2卷2冊
- 17. 日本書紀纂疏 一条兼良 慶長年間写 6卷6冊
- 18. 保元物語 同 2卷2冊
- 19. 平治物語 同 2卷2冊
- 20. 源平盛衰記 慶長年間刊(古活字) 49卷48冊  
〈元和元年7月購入本〉
- 21. 周易 王弼・韓康伯注 慶長10年刊(古活字) 10卷5冊
- 22. 礼記 鄭玄注 慶長年間刊(古活字) 20卷10冊
- △ 23. 古今韻会举要 黄公紹撰・熊忠举要 慶長年間刊(古活字) 30卷15冊
- 24. 元亨积書 积師鍊 慶長10年刊(古活字) 30卷10冊
- 25. 撰倭漢皇統編年合運図 积田智編 慶長16年刊(古活字) 2卷2冊
- 26. 保曆間記 慶長・元和年間刊(古活字) 1冊
- 27. 倭玉編 慶長18年刊 3卷3冊
- 28. 太平記鈔 附・音義 [慶長15年刊](古活字) 42卷10冊
- 29. 明德記 慶長10年刊(古活字) 3卷3冊  
(元和2年購入)
- 〈献上本〉
- 30. 施氏七書講義 施子美撰 (角倉与一) 慶長・元和年間刊(古活字) 42卷20冊
- 31. 新刻官板批評正百将伝 宋・張預撰 (承庵) 万曆年間刊 10卷2冊
- 32. 积日本紀 卜部懷賢 (龜庵) 慶長年間写 28卷8冊
- △ 33. 孔子通紀 潘府撰 (林羅山) 慶長年間刊(銅活字) 8卷4冊
- △ 34. 三綱行実図 僕循撰 (林羅山) 寛永年間刊 3卷3冊

- △ 35. 孔子聖蹟図 朱熹撰 (承昌) 寛永7年刊 2卷2冊
- 36. 新刻儀礼部羅先生巧正家礼通行 (妙心寺靈峰) 明・羅万化撰 万曆年間刊 8卷4冊
- △ 37. 玉海 王応麟撰 (物本屋) 元代刊 204卷100冊
- 38. 東鑑 寛永3年刊 (徳庵) 52卷50冊
- 39. 続日本紀 菅野真道等撰 (角倉平次) 江戸初期写 40卷13冊
- 40. 日本文徳天皇実録 藤原基経等撰 (角倉平次) 同 10卷4冊
- 41. 日本三代実録 藤原時平等撰 (角倉平次) 同 50卷13冊
- △ 42. 菅家文章 菅原道真 (角倉平次) 同 12卷5冊
- 43. 元貞新刊論語纂図、論語积文音義 (種村貞推考) 音義陸徳明撰 元貞2年刊 2卷1冊
- 44. 重校琵琶記 高明撰 (種村貞推考) 明代刊 2卷1冊
- △ 45. 八雲御抄 順徳天皇 (種村貞推考) 江戸初期写 6卷6冊
- △ 46. 下紐 里村紹巴 (種村貞推考) 同 1冊
- 47. 日本書紀神代卷抄 清原宣賢 (成瀬正虎) 慶長年間写
- △ 48. 陋巷志 顔胤祚等修 (堀立庵) 刊(万曆29年序) 8卷4冊
- 49. 寛永行幸記 金地院崇伝 (金地院崇伝) 寛永年間 2冊
- 50. 鴻栖館印選 吳忠篆 (本屋善左エ門) 万曆43年拓本 2卷2冊
- 〈収書〉〜寛永3年
- △ 51. 太常李樓雲楽書 李文察撰 嘉靖年間刊 7卷4冊
- 52. 有象列仙全伝 王世貞編 万曆年間刊 9卷5冊
- △ 53. 大明一統志 李賢等撰 明代刊 90卷50冊
- 54. 太平御覧 李昉等撰 万曆元年刊 1010卷120冊
- △ 55. 芸窓清玩 胡文煥編 万曆21年刊 35卷12冊
- 56. 僊伝奇踪 洪応明編 万曆年間刊 8冊
- △ 57. 歴代小史 李拭編 刊(万曆12年序) 105卷24冊
- △ 58. 宇多系図 江戸初期写 1帖
- △ 59. 本朝皇胤紹運録 同 3帖
- 60. 倭名類聚鈔 源順 元和元年刊(古活字) 20卷10冊
- 61. 大倭物語 明応5年写 2冊
- 62. 大鏡 室町時代写 3冊
- 63. 今鏡 同 10卷10冊
- 64. 水鏡 同 3卷3冊
- 65. 増鏡 応永9年写 3冊

66. 四河入海	釈清三 慶長年間刊(古活字)	25卷100冊	△97. 草書千字文	周興嗣次韻 江戸初期写	1冊
○67. 本朝統文粹	江戸初期写	13卷6冊	○98. 古今印則	程遠泰撰 明代刊	4冊
○68. 御成敗式目	慶長12年刊	1冊	△99. 農器図譜	王禎撰 嘉靖年間刊	20集4冊 (以上14年)
○69. 古語拾遺	斎部広成 江戸初期写	1冊	△100. 程朱闕里志	趙滂撰 刊(万曆43年序)	(16年) 8卷8冊
70. 侍中群要	橘広相 寛永元年写	10卷10軸	○101. 造伊勢二 所太神宮 宝基本紀	江戸初期写	1冊
○71. 義貞軍記	天文19年写	1冊	○102. 類聚神祇本源	江戸初期写	1冊
寛永3年~			○103. 延暦神宮儀式帳	同	2冊
△72. 隋書	唐・魏徵等撰 正徳10年刊(嘉靖年間修補)	85卷20冊	○104. 中臣菟記解	同	1冊
△73. 宋史	元・脱脫等撰 万曆27年刊	496卷100冊	○105. 古事記裏書	同	1冊
△74. 遼史	同		○106. 棠陰比事物語	江戸初期刊	5卷5冊
△75. 金史	同		○107. 卮言抄	林道春 元和元年刊(古活字)	2卷2冊 (以上7年)
△76. 元史	明・宋濂等撰 刊(嘉靖年間修補)	135卷25冊 210卷50冊 (以上3年)	△108. 周易抄	室町時代写(文明9年奥書)	19冊 (11年)
△77. 大中丞南公祖凱歌副墨	明代刊	1卷1冊	○109. 公卿補任	江戸初期写(正保4年補写)	56冊
△78. 西湖遊覧志	明・田汝成撰 明代刊	12卷6冊 (以上5年)	○110. 日本紀略	江戸初期写	19冊
△79. 福州府志	明・林燦等修 刊(万曆24年序)	36卷8冊	○111. 宇治拾遺物語	同	5冊 (以上12年)
△80. 大明一統文武諸司衛門官制	明・葉時用增補 万曆41年刊	5卷4冊	年代不明		
△81. 小学書図彙括纂要	刊(万曆37年序)	3卷2冊	○112. 日光山御仏事記(寛永13年)	江戸初期写	1冊
△82. 新刊理氣詳弁纂要三台便覧通書	明・林紹周等輯 明代刊	20卷14冊	○113. 宇多紀略	林道春編 江戸初期写	3卷3冊
△83. 新刊正文対音捷要琴譜真伝	楊表正撰 明代刊	6卷6冊	○114. 類聚国史	菅原道真 江戸初期写(享和2年補写)	66冊
△84. 呉姫百媚	呉下宛瑜子編 明代刊	2卷1冊 (以上6年)	○115. 神皇系図	江戸初期写	1冊
△85. 大易象数鉤深図	張理撰 明代刊	3卷3冊	○116. 信長記	小瀬甫庵 寛永年間刊	15卷5冊
86. 周易図	明代刊	3卷3冊	△117. 古今書札判形之写	慶長年間写	4卷4冊
△87. 四書章句輯釋通義大成	倪士毅輯 朝鮮古活字本(正統8年序)	39卷23冊	○118. 出雲国風土記	江戸初期写	1冊
△88. 四子	明代刊	10卷4冊 (以上7年)	○119. 太平記拔書	慶長年間写	1冊
△89. 皇明諸司廉明奇判公案伝	余象斗編 明代刊	2卷2冊	○120. 土佐日記 妙寿院本	紀貫之 江戸初期写	1冊
△90. 警世通言	隴西君撰 明代刊	40卷12冊	○121. 人丸供	江戸初期写(題簽徳川義直筆)	1冊
△91. 新鐫國朝名公神断詳情公案	陳眉公撰 明代刊	5卷2冊 (以上10年)	○122. 万葉集註釈	積仙覚 江戸初期写(寛永13年堀杏庵識語)	10卷10冊
△92. 合刻名公案断法林灼見	清虚子編輯 刊(天啓元年序)	4卷4冊	○123. 経国集	滋野貞主等編 江戸初期写(題簽徳川義直筆)	6冊
△93. 輪廻醒世	明代刊	18卷18冊	○124. 懐風藻	江戸初期写(題簽徳川義直筆)	1冊
△94. 名山勝槩記	何鏗撰 崇禎初年刊	60卷64冊 (以上11年)	○125. 禁中並公家中諸法度	寛永年間写	1冊
△95. 明状元図考	顧祖訓撰、黄応澄図 万曆35年刊	5卷5冊	○126. 江家次第抄	一条兼良 江戸初期写	7卷5冊
△96. 閩鑑図集	黄尚文等編 万曆37年刊	3冊 (以上12年)	○127. 太田和泉守記	太田牛一 慶長12年写(自筆)	1冊
			○128. 朝鮮征伐記	堀杏庵 江戸初期写	2卷2冊
			○129. 寛永御即位記略	同 寛永年間写(自筆)	1冊図2枚
			目録		
			130. 御書籍目録(元和・寛永)	江戸初期写	2冊
			131. 同(慶安4年)	同	1冊
			132. 御文庫御書籍目録(寛政)	写	12冊

(10/30、10/31以外にも随時展示替いたします)

蓬左文庫の蔵書印

その17. 細井平洲  
近松茂矩(錬兵堂)

織 茂 三 郎

江戸時代後期の学者として、また、教育者として、平洲の名はひろく知られているが、今回はその蔵書印をとりあげた。平洲は享保十三年(1728)、尾張国知多郡平島村(現東海市。平洲の号がこの村名から出ていることはいままでのない)に生まれたが、幼少より学問を好み、京都にのぼってまなび、また、長崎へも遊学して一家を成した。その学風は、いわゆる折衷派に属し、ひとつの流儀にこだわるところがなかった。由来、尾張藩の学風はだいたいにおいて自由に各派が行われたが、平洲はその代表的な学者といえる。その講義のたくみ

なことも抜群であって、平洲先生の口演とあれば、いたるところ、一般の庶民層までよろこんで耳をかたむけたという。書籍も多く集め、少年のころ、家に本さえあれば満足し、あえて足を戸外へ向けなかったことが一年に及んだといわれる。平洲には政治的才能もあり、米沢の上杉家に招かれて藩政の改革に功をおさめたことも有名である。享和元年(1801)没、年七十四。

さて、尾張では、天明3年(1783)九世の藩主宗睦(むねちか)により、藩校明倫堂が開設されたが、初代の督学(学長)には平洲が民間から起用された。その人望の高さは、想像にあまりがある。現在、平洲の生地には東海市立平洲記念館が設立され、その遺徳をしのぶ人が多い。

ところで、ここに掲載される平洲の蔵書印は、その旧蔵書「白氏文集」(唐・白樂天著)におされたもので、「徳民」とあり、たて16mmよこ16mmの小型印である。徳民は平洲の名で、一般に蔵書印は持主の号、もしくは家の名を用いる場合が多い。ちなみに、この蔵書印をもつ「白氏文集」はいわゆる元和古活字版として世に知られ、さらに平洲の旧蔵でもあり、平洲自筆とおぼしい書入れが多いという点からもまれにみる貴重図書といえる。

近松茂矩(1697~1778)は通称彦之進、江戸中期における尾張藩の代表的な兵学者で、少年のころ吉通の伝を受けて、一全流(全流とも)を興したが、吉通が早世したため、さらになお、長沼流の軍学を学んで奥義に達し、多くの著書と子弟とを出した。四代藩主吉通に仕え、吉通は勤王の志があつく、藩祖義直の精神をいっそう拡充して近松につたえ、茂矩はこれを「円覚院様御伝十五条」と題して手録し、これがかくれたる尾張家の勤王思想として維新の舞台に大きな役目を果たしている。

さて、茂矩は単なる武人ではなく、茶道・俳諧その他に興味をもち、「茶窓問話」「南海隨筆」などの著書もあるが、なかでも「昔咄」(13巻)は、江戸初期の武家気質を素朴な筆でしるしたものとして、その史料的価値とともに高く評価され、「名古屋叢書」(雑纂編)にも収められている。

茂矩の蔵書は、兵書関係を主として数十部、蓬左文庫に所蔵されるが、これより先、財団法人尾張徳川黎明会(現徳川黎明会)の専務理事鈴木信吉氏が入手され、あらためて文庫に寄贈されたものである。

さて、茂矩の蔵書印には二種あって、A(仮称)は朱印でたて30mm、よこ21mmのやや小型、文字は「錬兵堂」とある。B(仮称)は長方形の大型印で、たて122mm、よこ32mm、「尾張国名護屋城坤広井縣錬兵堂蔵本」とあり、これには墨印が用いられている。「錬兵堂」は茂矩の号であるとともに、その私塾の名称でもある。朱印は巻頭の下の方に、墨印は遊紙の表におされている例が多い。このような捺し方は珍しく、いままでにその例をみない。なお、既述の鈴木信吉氏の蔵書印も、巻頭にみえるけれども、三種となると煩瑣のおそれもあるので、この方は今回は割愛して、別の機会にゆずりたいと思う。

(元蓬左文庫調査研究員)



「徳民」印



「錬兵堂」印

# 出版物一覽

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S. 50年刊)	3,500円	名古屋叢書三編第12巻(S. 56年刊)	3,000円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S. 51年刊)	4,000円	同 第8巻(S. 57年刊)	3,000円
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(同)	2,500円	同 第16巻(同)	3,000円
尾崎久弥コレクション目録第一〜三集 (S. 52〜55年刊) 各	1,500円	同 第19巻(同)	3,000円
名古屋叢書(正編)索引・総目録(S. 53年刊)	2,000円	同 第17巻(S. 58年刊)	3,000円
名古屋叢書続編 索引(S. 47年刊)	700円	同 第4巻(S. 59年刊)	3,000円
名古屋叢書続編総目録(S. 44年刊)	400円	同 第9巻	
善本解題図録第一〜三集(S. 55年再版)	各 300円	一松濤棹筆(抄) 上( S. 60年刊)	3,000円
日本の古典<蓬左文庫図録>(S. 52年刊)	200円	同 第11巻	
蓬左文庫・源氏物語図録(S. 53年刊)	300円	一楽寿筆叢他一 (同)	3,000円
蓬左文庫所蔵古地図複製 No.1〜No.13		同 第18巻(1)	
No.12 海東郡(S. 60年刊)		一横井也有全集 下(1)一(同)	3,000円
No.13 海西郡(同)		同 第18巻(2)	
(S. 55〜60年刊) 各	1,800円	一横井也有全集 下(2)一(近刊)	3,000円
御本印型書鎮(S. 58年製)	1,000円	堀田文庫蔵書目録(S. 58年刊)	500円
		蓬左文庫図録(同)	1,500円
		蓬左文庫絵葉書<8枚組>(同)	300円

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

## ▷▷▷ 利用ご案内 ◁◁◁

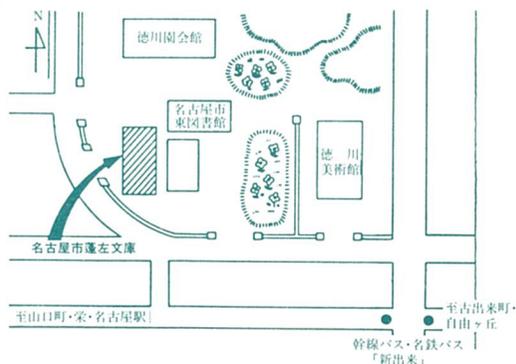
- ▷開館時間 午前9時30分〜午後5時
- ▷休館日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)  
祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)  
" 月曜 " 月・火休館  
年末年始(12月28日〜1月4日)
- ▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません  
(閲覧料) 普通図書 無料  
重要図書 有料(1部350円)
- ▷展示 随時蔵書の一部を展示  
(特別展を除き入場無料)
- ▷複写サービス 普通図書のうち、保存上影響のないものについて複写サービスを行います。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影の申請を受け付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

### 名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052)935-2173

(<名古屋駅から> 市バス「基2」自由ヶ丘行  
名鉄バス「本地ヶ原方面」行  
<栄から> 市バス「基2」引山「自由ヶ丘」行  
「新出来」下車、徒歩4分



「蓬左」第24号 ☆昭和60年9月28日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)  
☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)